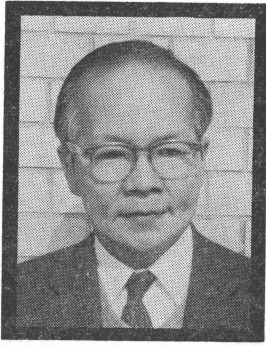


藤井義之さんを悼む



藤井さんにお近づきになれたのは函館海洋気象台に私が転動していったからで、孤高を守るかの如くに一隅に静かに坐られていた。そして近づきたい面ももたれた大のクラシック音楽ファンであった。日が経つにつれて藤井さんのおかれていた立場にあるものを感じ、当時の函館海洋気象台の学問的中心として欠かせない人ではないか、という疑念が浮び海洋にきて貰ったらと思いはじめ、その機会をうかがうことになっていった。そして数ヶ月をいわずして機熟し、台長に懇望して遂に実現した。しかし必ずしも歓迎された海洋課長ではなかった。両者に責任を感じる私も努力はしたが、彼の人柄がしみこむとともに誤解もとけ、親しみも湧き出していつとはなしに海洋畑の人望を集めていった。まだまだ活躍して戴きたい人であり、十分に若さも備えられていた人なのにとすると、私が海洋畑に引張りこんだことがわざわいしたのでは、という後悔の念がないわけではない。しかし反面ではよくもちたえられたという面ももっておられた。直接伺った話では、旧制一高に入学して間もなく腸チフスにかかれ1年休学された由、そのときの高熱が原因したらしく、職場の集団検診にみえた医師から、驚くほどの心臓肥大故決して無理をさせないように、と私は忠告されたことがあった。

藤井さんはみぬいていたらしく、私の立場を羨やみよく屋根裏の実験室と称するいたざら場にみえて、ほんとは僕も実験がやりたいんだよ、とハンダ付などやっていたことも再々あった。そして釧路沖の霧観測にも夕沙丸という小船ののって陣頭指揮にも出掛けたもので、入浴に上陸した折など若い人たちの慰安にと、当時流行の夫婦雑誌の月おくれを露店で買って帰ることも忘れず、うっかりすると今日は年寄り役を引き受けろと私も買われた。

この観測で私が作った細い銅線による抵抗温度計で測った、船側での接海面気温の分布が理論にあわないからこの温度計は使えない、ということで激論をたたかわせたことがあった。そして翌年に私共はビードサーミスターをはじめ海上の観測に導入し、同じような結果を得て彼の情熱をこの分野にひきこむことになった。この観測は3夏続きいろいろの分野にわたったので、私の担当した気温の資料は学位の材料に使って下さい、と提供した心算だったが世にでずに埋れてしまったのは残念に思う。もっとも学位に興味は薄らいでいたことはたしかであったが、私は藤井さんは大学に行かれて、気象と海洋の総合的視野からの、海空間のエネルギー交換問題の開拓をしてくれる人と秘かに願ったのに、間もなく醸し出されていった不快な問題に脱出をはかられ、某大を志していられず気象台に残ることになり、才能を生かすことなく終ってしまったように思えることは淋しい気がする。

しかし彼自身は大阪時代が一番楽しかったと私にもらされたが、滑川教授の後を直接懇望されたのにお断りした、という話はこの頃のことではなかったかと思う。そしてテニスに興じ過ぎて、心臓に負担を重ねていったのではなかろうか、そのために次の任地で身体の調子を狂わせ、悪化の度を進めてしまったように思われるのは、悔んでもあまりあることである。

追悼文に業績を述べないのは礼を失するかも知れないが、特高の目を逃がれて海軍水路部に職をえらび、敗戦の責に服す気持で函館に静かな余生を求めた、ともらされた藤井さんを引張りだそうとした若僧のふれる問題ではないと思うからであり、3人目のお嬢さんが生れたとき、悪童共がスリーボールのご心境は、とひやかしたとき「可愛いもんだよ」とまぎらし、4人目のお嬢さんが翌年生れたときはさすがに「うーん」と後の続かなかった、あのピケ帽をかぶって一番上のお嬢さんと、雪の赤川通りを買い出しに往復された姿、厳冬の夜の残業組に、課長がアルコールを飲ませたとあつては申せないから紅茶だよ、とウイスキーのたっぶりはいったのを、お嬢さんに届けさせた人間味に魅力があり過ぎたからである。

惜しい人をあまりにも早くお召しになられた神仏をうらまざるを得ないが、残念ながらもう帰られはしない。心からごめい福をお祈りするのみである。

気象庁高層課 中島 正一